ます、そこで、田野久は、はて　誰だらうな　と思つて、表の戸を、ひよいと明けて見て『ワーッ』と腰を抜かしました。

戸の外には、彼の大入道が、所々血だらけになつて、大きな目を光らかして、立つて居たのです田野久の腰を抜かして、そこに打ち倒れたのを見て　大入道は

『やイ　田野久、此間は、よくも〳〵己の嫌なものを饒舌つたな、その爲めに　おれは、とう〳〵こんなになつた。さー　今夜は、其敵打ちに貴樣の嫌な土産を此通り持つて來たのだ』

といひながら、いきなり　金貨だの　銀貨だのを取り混ぜて　幾らとなく手當り次第に打ちつけて歸つて行きました。

田野久は、丸で夢心地でありましたが、入道の歸つた後で、やつと氣がついて、そこいらを見ると、これは如何、家中一杯にお金だらけ。

夫で、田野久は、大蛇の土産のお蔭で、いつになく、お芽出たい　お正月を迎へましたとさ

めでたし〳〵

二人の音樂師

樵村生

或る夏のこと、獨逸國のウインと申します町の公園で、大天氣の極く美しい日に大層盛なる祭が御座いました、其の時に此町に住んで居る人々は身分の尊い人も、身分の卑い人も、若い者も、年寄も、幾万人と數へ盡されぬ程公園へ遊びに出かけました、其の中には又外國から遊びに來て居る人なども澤山雜つて、面白く、樂しく此の盛なお祭

を祝ひました。總て何處でも人出の澤山ある處には、見るも氣の毒な乞食が集るものでありますが此のお祭の時にも澤山の物貰が出て參りました、其の中に一人の哀れな兵隊上りのお老翁がありましたが、此のお老翁さんは外國の諺に「若い時には兵隊で、年を取つては乞食となる」といふことのある通り、兵隊の成れの果てゝあつたので御座います、で、乞食の仲間には或は足腰の役に立たぬ不具の者もあれば、子供に手を引かれて行く盲人もあれば、何かの藝をして觀客から一錢二錢の志を貰ふものもありますが、而し此のお老翁さんは人に物を貰ふにも兵隊上りの意氣地がありますから、何もせずに「どうぞ一文やつてください」といふことが出來ません、そこで自分が若い時分に少しばかり習うたことのある胡弓をひいて錢を貰ふをと致しました、勿論極々下手で御座いますから、此の老人の思ひますには、假令私が胡弓をひくのが下手であつても、私の灰色に成つてゐる顏や、跛になつて居る足や、ぼろ〳〵になつて居る衣服などを見たならば、あゝ可哀想にと思つて錢をくれるであらうと思つてるので御座います。

偖、多勢の人が公園へ這入つて來る道の傍に枝振のよい大きな楓の樹がありまして、其の木の下へ老人は腰を卸しまして、胡弓をひき始めました、此老人には一疋の能く馴れた犬がありまして、何時も老人が胡弓をひき始めますると、其の大は自分の口に老人の帽子を啣へて、立つて聽いて居る者の前へ行つて、いくらかゴゝ錢を其中へ入れて貰ふをと致します、處が老人は力一ぱいに胡弓を

ひきましたけれども、どういたしましたものか、誰れ一人錢をなげてくれるものはなくつて、皆な高笑に笑ひなから通り過ぎて終いました、犬の口に啣へられある帽子はまだ空のまゝ殘つて居るやうな有樣です、

軈て、もう太陽も暮れかゝりまして、四邊の仲間は家へ歸る仕度をするやうになりましたけれども、老人の帽子の中には一錢も這入つて居りません、日は暮れかゝつて仕度をするので御座いますから、老人はもう貰へるといふ望がありませんでした、そういふ有樣で御座いましたから、老人は大變心配致しました、外目ながら其心配の樣子がありゝと顏に顯はれて參りました、錢は一文も貰へず、日はくれかゝる手は疲れはてゝもう如何してもひくことが出來なくなりました、其上又、朝

から立ちつゝけてありますから、足も疲れてしまつたのでとう〳〵傍の石の上に腰を卸しまして物思ひに沈みました、老人は自分の手で額を押えてうつぶして居りましたが兩つの眼からは玉のやうな涙が地の上へぽつりぽつりと落て參りました。

偖てから力を落して慨き悲んで居る老人を久しい前から注意して居つた一人の立派な外國人が居りました、而し老人は其外國人には少しも氣がつきません、其外國人は打萎れて居る老人が悲みの餘りに涙まで流したのを見て、大そう憐れな心を起されました能く〳〵注意して見まするとその老人の手には憐れにも、指が三本殘つて居るのみでありました外國人は老人の傍へ參りまして、懷から幾ちかの金貨を取り出して、之を老人に渡しまして、そして、

『私に暫くの間胡弓を貸して下さいませんか…』と言ひまするとと、老人は喜んで早速胡弓を外國人に渡しました。

老人は唯糸をかきまはじて居つたのですから、善い音を出しませんでしたが、今此の外國人が使ひまするとと、誠に美しい音を出しました。外國人は老人に向つて、

『私か胡弓をひいて上げるから、貴方は錢を集めなさい』

と云ひまするとと、今迄外國人がひいて居る胡弓の美しい音に聞き惚れて、どうして自分には美しい音が出ないのに、此の人が使うとこのやうな音が出るのだらうと思ふやうな顏つきで、ぢつと見て居つた老人は、四邊に聽人が集まつてゐるのに氣がついて、早速帽子を取つて錢を集め始めました

誠に此の外國人がひきました胡弓の音は、前に老人がひいて居つた胡弓ではないかのやうに美しい音を出しました。清い樂しけな音を出します時には、恰當女の神樣が御聲をお出し遊ばすやうで又悲しい沈んだ音を出します時には思はず知らず其音が胸に染み込んで涙が出る位であります。そういふ風に誠に上手の引き手で御座いましたから今迄振り向きもしないで通り過ぎて終つたものが皆立ち止まつて、一人として其處を過ぎる者はない位になりました。聽いて居る者は皆息を殺して其美しい音樂の音に聞きとれて居ります。で、次第〳〵に四邊に立て居る人々の輪は大きくなりまして、尊い身分の人達さえ、車をとどめて聞いて居るやうになりました。暫くはそうして多くの人々が立つて聞いて居りましたが、何故あの見すぼらしい老人が錢を集めて、外國人が胡弓をひくのであるかと云ふをが、わかりませんでした。處が時がだん〳〵經つうちに、それは巧みな音樂師が老年の哀れな廢兵の爲めにひいてやるのだといふをが知れました、すると又夫を聞いて居りました者は皆哀れの心を起しまして、われも〳〵と古びた帽子の中へ錢を投げ入れるやうになりました、そこで其の帽子の中には金貨だとか、銀貨だとか銅貨だとか、色々のお金が充滿になりました。お金を集める爲めに馴らされてあつた犬は、自分の主人がお金を集めるのを見て、變な顏をして見て居りました。其上に、自分の主人が胡弓をひいて自分が集めた時には一文も貰へなかつたのが、知らぬ外國人がひいて自分の主人が帽子を廻はすと降るやうにお金が這入りますから、其犬は驚かず

には居られません、處で、もう充分にお金が滿ちましたから老人は夫を他所へあげました、外國人は、尙ほひいてくれますから、老人はやはり、帽子を以て聽衆の前へ參りますると、忽のうちに、又其帽子が、充滿になりました。そうしますと、外國人の眼は喜ひを以て輝きまして、益々熱心にひきました、此の外國人が胡弓をひきます間は、丁度聽衆の人々は死人のやうに靜かてありますが一曲〳〵つゝ終りますると、又賞讃の言葉で、まるで嵐のやうで御座います。そういふ風に賑やかであるのが、又ぞろひき始めますると、皆水をうつたやうに靜かになります。音樂師は喜ばしい、樂しい調子にひく時は、聽衆も亦樂しげになつて悲しい哀れげな調子にひきますると、又人々の顏は悲しげに見えます。

兎角するうちに、日ももうくれて、寒くなつて來ました、外國人はそこで『我君に幸多かれ』といふ歌を謠ひ出しますと、此の歌は聽衆の能く知つて居る歌で御座いますから皆帽子を取つて一齊に聲を立てゝ歌ひ出しました、聽衆の人々が一齊に謠ひ出しましたから外國人も非常に元氣づいて熱心にひきました、四邊は靜かになつて居つて日暮れ頃で御座いましたから、其聲は大そう大きい響をしまして、暫くは鳴りを止みませんでした。

すると外國人はもう充分に、廢兵の爲めにお金を貰つてやつたし、其上元氣のある『我が君に幸多かれ』の歌を謠ひましたから、胡弓を老人に渡しました、老人が

『どうも有難う御座いました』

と御禮を言ひ畢らない內に何處へか行つてしまい

ました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『あの方は誰ですか』

と群集の人々は廢兵の周圍に押し寄せてきて、問ひかけますると、元より少しも知らない人でありますから、

『私は知りません』

と答へました、尙ほ老人は言葉を繼いで

『私はあの方のお蔭で腹一ぱい食べるをが出來るやうになりました誠に有り難く思ひます、蔭ながら健康に幸ひに在らッしやるやうに願ひます』

と非常に喜びました、

そうしますと一人の紳士が群集を分けて出て參りまして言ひますには、

『私は能くあの方を知つて居ります、あのお方は

二三日前此處にまゐりました方で、胡弓ひきの名人で御座います、いつもこういふ風の慈善の爲めに盡しなさるお方であります』

と話されました、尙ほ其紳士は言葉を繼いで、

『皆樣と一所に此の御禮を申さうではありませんか』

と云ひました、すると一同は皆自分〳〵の帽子をとつて其の外國人の万歳を唱へました、猶ほ自分達の國の廢兵をこう云ふ風にして置いたのは、如何にも自分等が、惡かつたと氣がつきましたから、更らに幾許つゝかを老人に與へました、老人はこういふ深い惠みに預りましたから、大變に喜びまして老人の頰には熱いうれし涙がこぼれました、そこで老人は手を組んで神樣に向ひ、

『どうぞ私を救つてくだされた多くの人々に惠み

を與へて下さい』
と祈りました。
其後此の老人はもう胡弓をひくことをせず、無事に一生を送つたといふことで御座います、
（獨逸物語中より抄譯）

いそつぷ物語

其四十四　子供と狼

羊の番をして居る子供が、何時も、狼だ〳〵。と呼び廻はつては、吃驚して出て來る村人等を見て、指さして、嘲笑つて居りました。所が、或日の夕方、眞個に狼がやつて來たので、これは大變だと思つて、大聲を上げて、『狼が來た誰か來てくれ〳〵』といつて、走り廻はりましたが、村人らは、又彼の小僧めが惡戲をして居るといつて、誰も出てきてくれません、夫で狼は、思ふ存分に羊を捕つて食つて歸りましたとさ。眞實のことをいつても、嘘咄きの言ふことだと、誰も信じません。

其四十五　子供と蛙

子供らが、よつてたかつて　池の端で遊んで居ると、蛙どもが、時々水の上に頭を出して來る、夫を面白がつて石を投げつけては殺して居ますと、とうとう　其中の一匹が　頭を出して來て言ひますには『子供さん、お願ひだから、どうか　止して下さいな　あなた方は、夫で面白いでせうが、私共は、一匹ゴヽ死んで行くのですよ』

室内のお遊び

（六）　南京さん